



モットーは「健康・心・けじめ」

「外で子どもを遊ばせたい」と
2005年7月、保育所「ひまわり」をオープンさせた小倉世津子さん。子どもが大好き。そして女性の力が社会でもっと生かせるようにサポートしたい。小倉さんの根柢にある人づくりへの思いがこの保育所を始めた原動力になっている。秋晴れの保育所「ひまわり」を訪ねた。

美 生きる Vol.32

外で子どもを遊ばせたい



神奈川県「保育所ひまわり」所長 SETSUKO OGURA

小倉 世津子さん (68歳)

JR新川崎駅から歩いて15分ほどの住宅街の一角に保育所「ひまわり」はある。所長小倉さんの自宅1階部分が保育の場所として使われ、子どもたちが毎朝元気にやってくる。まだよちよち歩きの1歳児からまもなく小学校に上がる5歳児まで、20人余りの子どもたちが朝から夕方まで小倉さんほか4人の保育士とともに過ごす。

保育所「ひまわり」のモットーは「健康・心・けじめ」。毎日、ラジオ体操を欠かさない。体操を始める前には保育士さんの掛け声で「お背中ピッ!」ではご一落に、おはようございます」とこあいさつ。どの子どもも一生懸命お辞儀する姿がなんとも微笑ましい。

「社会に出るための基本は、まず、あいさつ。ですから」と小倉さん。あいさつが人間関係をつなぐ第一歩であることを、幼児期の段階できちんと教えることが大切であると確信している。

小倉さんは夫婦ともに新潟県出身。結婚してここ川崎市に移り住んできた。やがて某

化粧品と出会い、代理店から社員へ。そこで現在の指針ともなっている生き方を学ぶ。オーナーより教えられた人間の原点ともいえるべき教えは小倉さんの支えとなり、名刺の裏に書かれた「小倉世津子訓」ともなっている。

その教えを実践できる場として保育所に着眼。幼児期の体験こそが人間形成に大きな影響を及ぼす。外で元氣いっぱい遊ばせ、心豊かな子どもを育て、昨今社会問題になっているいじめや虐待などを防ぎたいと願うと同時に、働く女性を応援し、少しでも少子化に歯止めをかけたいとも。

小倉世津子訓
 一、人を大事にする
 (その人の可能性を知る)
 一、人を許さない
 一、責める前に自分を見る
 一、感謝をする
 一、見返りを求めない
 一、仕事は楽しむ

早い子は朝7時にやってくる。預かる側だけでなく、預けるお母さんにも朝は大忙しだ。夕方も時間を気にしつつ駆けつける。毎日が時間との戦いである。「職場では精一杯、力を発揮して欲しい」。そのためサポーターをすることも保育の意味の一つと考えている。「だから保育所は子どもだけではなく、お母さんにとっても研修なんです」。

3カ月前からひまわり保育所に預けられるようになった弦人くん、3歳。自宅で仕事をする父親の元で育てられ、何でもしてもらえ環境にいたせいか、当初、話しかけても何



も反応しない子だったという。小倉さんらが話しかけ、お友達と遊ぶ中で、今ではよくお話もできるようになった。そんな成長を見るのも保育の楽しみであり、喜びでもある。

「三つ子の魂百までですもの」と小倉さんは弦人くんの変化をわが子のように目を細めて見守る。

子どもの命を預かる保育所。運営していくとなると大変な苦勞があるのでは...と思うが、「責任問題ばかり考えていたら前に進まないでしょう。今、生きている子のことをだけを考えていますから」と小倉さん。どんなことがあっても決して「大変」だとは思わないのだそう。そういう生き方をしているからストレスとは無縁。夢は「生涯現役で死ぬまでできることを頑張ること」。

毎朝、小倉さんは近くの夢見ヶ崎公園にラジオ体操に出かけるのを日課にしている。9年ほど前に誰からともなく始まったこのラジオ体操。道すがら誰にでもあいさつをする小倉さんは、行きずりの女性を誘うこともある。そうして仲間が仲間を呼び、今では50人から70人が集まってくるちよつとした団体に。

このラジオ体操に行くときに、小倉さんは「今日の一言」を書いて持っていく。前日にひらめいた言葉を墨で書き、体操に来た人たちに見せて回るのがそう。その日の言葉は「明日を信じる」だった。

こんな保育所が近くにあってたら、「もう一人人生みたい」と思う女性がもっと増えるに違いない。(取材・編集部)

保育者 明日を信じる